

ばらぐみ ギオンまつり
～わくわくドキドキの1年間～

淀保育所 田中未菜

1. 概要

淀保育所は京都市南部に位置し、東に宇治川、西に桂川が流れる。古くからの住民が多く、淀地域への愛着が深い。河川敷や淀競馬場、高瀬川沿い、淀城跡、田園の残る住宅街等、日常のあそびの場には恵まれ、自然に触れる機会も多く、子育て環境としても恵まれている。保育所は昭和27年に開設され、現在定員130名（乳児50名 幼児80名）の乳幼併設保育所である。

2. はじめに

平成29年度年長組は27名（男児13名女児14名）を保育士2名で保育していた。クラスの子どもたちは末っ子が多く、保護者からはかわいがられて育ててもらっているが、兄や姉と比べられることも多く、期待されることも多いと感じていた。子どもたちは大人の視線や周りの友だちにどう思われるかが気になり、自信をもって自分で考えて行動することが苦手で、それ故、保育士への確認（「〇〇であそんでもいい？」）や指示待ち、誰かと一緒でないと不安でできないという印象が大きかった。甘え上手で人懐っこく、保育士や実習生にも肌を触れ合うようなスキンシップを求める姿も多かった。友だちとの関わり方は優しく、譲り合いや教えあう姿もみられ、友だち同士のトラブルは少なかった。年度当初、わからないことがあると何でも保育士に聞き解決する子どもが多いクラスであった。担任同士で相談し、自信をもって自分で考えて行動できることを1年のねらいにし、保育がスタートした。わからないことをそのまま子どもに返すのではなく、保育士も一緒に「こういう時はどうしたらいいと思う？」となげかけたり、「一緒に調べてみよう」と子どもと一緒に図鑑を手にすることから始めた。答えを知ることよりも、自分がどうしたいのか、なぜそうしたいのか、どうしてそうなったのかなどの過程を大切にしていこうと、自分で調べてわかることの楽しさに気づき、友だちの前で発表する姿も見られた。いろいろな活動の中で5、6人のグループで相談し、自分の思いを伝える経験も大切にしてきた。友だちと一緒に悩み考え、試行錯誤して活動することを通して、言われた通りにするよりも、楽しく達成感が味わえることも知ってほしいという思いで保育してきた。

4歳児の年度末には、日本の地名に興味を持ち、年長になって初めのグループ名は都道府県に決まり、地図を見て特産物を知ったり、知っていることを友だちと話す姿があった。自分たちの住んでいる「京都」についても興味を持ち、菜園活動で京野菜を育てたり、京の通り名の歌を歌って楽しんでいた。そうした中で所外保育「祇園祭」に向けて、そこからつながる保育実践を記述する。

3, ばらぐみぎおんまつり実践記録～わくわくドキドキの1年間～

○所外保育「祇園祭」に向けて



7月11日の所外保育「祇園祭」に向けて6月から祇園祭の絵本を読んだり、部屋に祇園祭のポスターや手ぬぐいを飾り、子どもたちが興味を持てるように環境を整えた。昔から続く祇園祭が、今もなお行われていることに驚き、興味を持つ姿もあり、「なんていう鉦だろう」と調べ始める子どももいた。不思議に感じたことを保育士と一緒に調べたり、祇園祭について詳しくなってきた友だちに聞くように働きかけた。家でも保護者と祇園祭について調べたり、図書館に行って調べる子どももいた。調べたことを友だちの前で発表する時間をつくることで、祇園祭への興味が広がっていった。7月に入ると祇園祭が始まり、新聞に載っている祇園祭情報を持ち寄り、子どもたちの中から



「行ってみたい」という声があり、それから「所外保育で祇園祭に行こう」と子どもたちに伝えた。部屋には祇園祭の時に玄関に飾られる「ひおうぎ」という花を飾った。保育士も祇園祭について知らないことが多く、子どもと一緒に調べながら保育をすすめていた。所外保育当日に見ることができる鉦を調べ、その鉦を重点的に部屋に掲示し調べたことを書き込めるようにしていった。

祇園祭に行こう～ばくたち、わたしたちの鉦づくり		
子どもの姿	環境構成と配慮	教育的働きかけ・関わり方
7月11日 所外保育で祇園祭へ ・今日しか見られない「鉦立て」が見られると知り、「釘とか使わんと立てるんやろ？」と嬉しそう。四条通を歩きながら「てらごこ」の通り名のうたを口ずさむ子もいた。 長刀鉦が見えてきた！ 遠くに見える四角く組まれた木が見え早足になる子どもたち。鉦の大きさ、長さ、縄の太さに釘付け。クレーンなどを使わずゆっくり立てられる鉦を見て口々に「大きい」「思った	・鉦立ての日程上、所外保育当日には、本に載っているような鉦は見られないことが分かり、「今日しか見られない、鉦を立てているところが見られる」ということを伝える。 ・大人も純粋に感動したことを言葉やジェスチャーで表現する。	・鉦までの道中、祇園祭の装飾（小さな鉦、鉦の扇や絵）を発見すると足を止め、子どもたちが調べてきたことが実際に目の前にある喜びを感じながら進む。



より大きい」「〇〇銚や」「すごい」と感想が止まらない。函谷銚では、紙垂を付けさせてもらう。お清めの塩が子どもたちの方まで飛んできて思わず舐める子どもたち。「辛い！塩や！」と興奮気味。函谷銚もまだ横になっている状態だったため装飾が間近で見られた。「にわとりや」との友だちの声に事前に調べていたことを思い出して喜ぶ子もいる。銚立ての役人の方に「あっちがオスの鶏でこっちがメスの鶏」「ここにその（調べていた）人が乗っている」と教えてもらう。

・帰所してからも祇園祭のことを他職員に話したり、迎えのときに保護者に話す姿がある。

7月12日 再び絵本「祇園祭」を見る

・1回目に読んだ時とはまるで反応が違う。「同じや」「見た」と口々に言いながら絵本に釘付けの子どもたち。

7月13日～ 銚の絵を描こう

・「どんなところが描きたい？」と子どもたちになげかけると、「縄で銚を建てているところ」と言う子どもたち。描き進める中で、「組木だけでは銚らしく見えない」と言う子どももでてきた。「屋根や人が乗るところはみんなのイメージする銚を描いてみよう」と伝え、自分の思う銚を描きながら「上が描きたいから画用紙つなげてほしい」と何枚もつなげて描きすすめていく姿があった。



・完成が銚らしく見えるよう、帯布を数種類用意し、縄のところに被せて貼ることを伝え、帯の柄も選んでもらう。（帯をめくると組み木の部分が見える仕掛け）

・帰所後、祇園祭に行った様子を写真と共に平仮名で書き、子どもたちの見やすいところに掲示する。



・実際目にして感動しているが、調べてきたこととつながらない子どももいたため「〇〇くんが持ってきてくれた手ぬぐいと一緒やな」「本に載ってるのと同じやな」とつながるような働きかけをする。

・教えてもらった情報を復唱したり、わかりやすく言葉を変えて子どもに伝える。



・いつも使っている造形の部屋ではなく、祇園祭関係の本や写真が沢山飾ってある、ばら組の部屋で描く。何枚も画用紙を使って背の高い銚を描くことを予想し、スペースを考え、9人ずつ3交代で描くことにする。他のグループは別室で積み木を沢山集めて積み木の世界を楽しむ。



・銚の絵と言えばきれいな装飾を思うが、実際に見た銚が描きたいという思いを受け止め、銚立てのシーンを話しながら思い出し描くことにした。

・筆が止まる子には「写真見えていいよ」と伝え、自分の目で見て調べたり考えられるようにした。

・積み木の世界では「鉾作り」と子どもたちから鉾作りが始まる。はじめはすぐに倒れる鉾だったが、「今度は倒れへん鉾つくりたい」と部屋から鉾の本を持ってきて写真を見ながら夢中で作っていた。経験したことから、鉾の棒に緑の櫛を作り、鶏をはじめとする動物を乗せていた。出来上がった鉾を見て「巡行しているみたいやな」と嬉しそうにしている。



・積み木の世界では写真や本を見ながら作りたい思いを汲み取り、資料を用意する。
・カプラや積み木をしていた部屋は造形の部屋なので、作った鉾を残した状態で自分たちの部屋に戻る。



7月18日～ 鉾を作ろう

・前日の巡行に連れて行ってもらった子どもやテレビで巡行を見た子どもも多く、朝から話題は祇園祭。新聞の切抜きを持ってくる子もいる。
・空き箱や廃材を家庭にも協力してもらい、沢山集め、鉾作りが始まる。何個も空き箱を積み、何を使ってくっつけるのがきれいに見えるかなど話ながら形にしていく。友だちの作る鉾を見て真似したり、出来上がっていく鉾を嬉しそうに友だちに見せる子もいる。

・大小様々な空き箱、空き容器、和紙、カラーフィルム、でんぐり、モールなど、色々な素材を準備する。
・続きがいつでもできるよう、道具や材料は常設し、給食を別室で食べる日が始まる。



作った鉾は玄関にも飾り、朝はBGM「長刀鉾」のコンコンチキを流す。他のクラスの保護者も「祇園祭だっ」と子どもと会話している。

7月20日 大きな鉾の設計図を描こう

・5人6人グループでそれぞれの鉾をどんな鉾にしたいか相談する。それぞれが自分のグループのイメージを屋根や装飾に表現している。本や写真で調べる姿よりも、自分たちのイ

・自分たちの設計図を部屋にはり、いつでも見られるようにする。



・1グループが描き終え、2グループを呼びに行くが、積み木の世界の鉾作りがとても盛り上がっているので途中で切り上げず、積み木の世界のあそびを続ける。
2・3グループの子どもたちは別日に絵を描くことを伝えたと納得し積み木を楽しんでいた。

・材質によってくっつきやすい物や切りやすい道具を伝えたり、自分で気づけるよう見守る。



・イメージが湧きづらい子どもには箱や容器で積み木遊びのように一緒に組み立てたり、友だちの作っている姿と一緒に見回るなどして、イメージが湧くよう、また膨らむように関わる。

・話合いができるグループと話がまとまらないグループがあるので、話がまとまら

メージを共有し、相談しあって作り上げる姿が多く見られた。

大阪府グループ：マグロの乗った月鉾

京都府グループ：大文字鉾

北海道グループ：メロン鉾

静岡県グループ：赤富士鉾

沖縄県グループ：海ブドウのついた海鉾

7月24日～ 大きな鉾作り始まり

・自分たちで描いた設計図を見て色や形を決め、作っていく。グループで役割を分担するグループや、みんなで同じところを協力して作っていくグループ、自分たちのイメージを形にできず「どうしたらいい？」と保育士に聞くグループがある。

・小さい鉾を作った経験から、素材の扱いが上手な子が多い。

・できてきた鉾に「〇〇も付けてみたい」と設計図に無いものをつけていたり、アイデアがどんどん膨らんでくるグループもある。

・「これほんまに巡行させたいな」「紐つけて引っ張ったらいいいんちゃう」と完成後、巡行させたいという思いも高まってきた。

祇園祭後祭り巡行を見る

・保育士が作った架空の「祇園祭巡行鑑賞チケット」がクラスに届き、所内のテレビで巡行を見せてもらう。チケットを一人ずつ持ち、とても嬉しそうに事務所に向かう。事務所では椅子が用意され、チケットに大船鉾のはんこを押してもらう。本物の巡行を見て「これ南観音山や」「鯉山や」と盛り上がる子どもたち。



・設計図に合いそうな色や材料を用意する。



・わくわくするようなチケットを作り、事務所と相談し、鑑賞会を行う。



ないグループには寄り添い、話の進行役を少しして話の流れを作るようにする。



・保育士が入らないと進まないグループは、保育士が答えを出すのではなく、ヒントを出したり、他のグループがどう作っているのか見ておいでと促す。そこで得た情報をどう形にするのかを子どもたちと整理して制作を進める。

祇園祭の時に巡行をテレビなどで見ていない子もいた。後祭りの巡行が平日なので、見せてあげられないかと担任間で相談する。



○親子のつどい「ばらぐみ ぎおんまつり」に向けて



「8月4日の親子のつどいで鉾の巡行をしよう。巡行だけでは物足りないし何かお祭りっぽいことしない？」と話すと、祇園祭に行った子どもが、屋台が出ていたことを教えてくれる。すると他児が「子どもがお店してお母さんたちにお客さんになってもらったらいいやん」と発案。親子のつどいでお店屋さんをすることになった。グループごとに何屋さんにするのか、何が必要なのかを話し、必要なものを書き出していく。保育士の指示を待っていたり「これでいい？」と保育士に確認する子どももいる

が、友だちに相談するよう促し、相談しても解決できない時には話合いに入り話を進行したり、ヒントになることをいくつか伝えるようにした。それを聞いてどうするかはグループで話し合えるようにした。「できればグループの県にあった屋台を出せれば楽しいね。」と話し、決まったお店は、大阪府：たこやき 京都府：きゅうりの一本漬け 静岡県：静岡焼きそば 北海道：綿菓子 沖縄県：かき氷



ぼくたちの ばらぐみぎおんまつり		
子どもの姿	環境構成と配慮	教育的働きかけ・関わり方
8月4日 親子のつどい  ・保育参加で祇園祭を開催。巡行、お店屋さんごっこをする。今までの活動をおうちの人に見てもらおうと張り切る姿がある。巡行の時の振付もグループで話し合い、「エンヤラヤー」と声を合わせ嬉しそうに巡行している。お店屋さんごっこではホールに一人ずつが描いた大きな鉾の絵を並べて飾ったり廃材で作った鉾を飾り、まるで巡行の中で屋台を出しているという雰囲気を楽しんだ。BGMは長刀鉾の音楽（コンコンチキ）	・ホールに飾っている一人ひとりの描いた鉾や廃材で作った鉾を見ている保護者には、描いた時の様子やこだわってつくったポイントを伝える。 	 ・「自分の親が買いに来たときは自分が商品を作り、接客する」という約束が守れているかを見守り、気持ちが高まって交代したくない状態になっている子どもには、そばでもう一度約束を伝えたり、順番や役割があることを伝える。
ただのお祭りごっこではない、クラスで盛り上がっている「祇園祭」であることや、今までの経過を保護者に分かったうえで参加してもらいたかったので、子どもたちが準備している間に子どもたちの活動の様子を紹介したり、子どもたちの思い（こんなところを見てほしい）を伝える。		

8月8日 みんなでお店屋さんごっこ ・1歳～4歳児をお店屋さんへ招待する。 ・3・4歳児が嬉しそうに受け取って食べる真似をする姿を見て嬉しそうな子どもたち。	・各クラスにお金やチケットを配り、お店屋さんごっこの雰囲気を楽しめるようにする。	・4日のお店屋さんごっこを振り返り、補充すべきものや改善することをグループごとに確認し、子どもたちがすることを明確にする。
---	--	---



○生活発表会にむけての取り組み

生活発表会の劇を何にするか担任間で話し合った。子どもたちの祇園祭への関心も一段落している感じもあり、別の劇にするか悩む中、散歩中に子どもたちが「桃太郎」をパロディーして楽しんでいる姿を目撃する。子どもたちのその姿にヒントをもらい、桃太郎を基にした「ひおうぎたろう」の創作劇をつくった。保育士が「ひおうぎたろう」を熱演すると、鉦に乗る動物たちの登場に目を輝かせて「次はお稚児さんが来るかも」とわくわくしている。子どもたちの反応を見ながらストーリーも変わり、自分たちが経験したフラダ



ンスの「ハワイ島」やグループ名でもある「沖縄県」4歳児クラスがテーマにしていた「ひょうたん島」も登場する楽しいお話が出来上がった。創作物語の役が決まると友だちを誘い、劇ごっこを楽しんだり台詞を覚えることが苦手な子どもも何度も絵本を読みストーリーを理解し、自分の言葉で話せるようになった。

生活発表会も近づく11月末、落語家である保護者に落語をしにきてもらい「落語会」を行った。普段触れることの少ない日本文化の「落語」に間近で触れ、体験をさせてもらい、その後の劇遊びの練習では台詞の言い回しを工夫する子どももみられた。



生活発表会「ひおうぎたろう」～劇遊び		
子どもの姿	環境構成と配慮	教育的働きかけ・関わり方
12月2日生活発表会「ひおうぎたろう」 ・総練習2回目で動きやセリフにも自信がついてきた子どもたち。その後の練習で自信を積み重ね、アドリブで船を揺らしたり、笑顔でセリフを言う姿もあった。発表会終了後「ドキドキしたけどたのしかった」と目を輝かせる子どもたちだった。	・小道具や大道具は子どもたちと相談し、練習する中で足りないものや、あった方が良いものを考え、作っていった。	・自信がなく、自分のタイミングで台詞を言えない子どもが多かった。自分で覚えて自信をもって言えた時の達成感を感じてもらおうと台詞をすぐに教えずに目線の合図でタイミングをつかめるように練習してきた。



12月4日～ 劇遊び

・新しいコーナーで自分の役以外の役になって遊ぶ子どもたち。絵本を持ちながらセリフを言ったり、自分の役のセリフを教えてあげたりする姿もある。どの子どもとても楽しそうに遊ぶ。



やってみたかった役になって何度も劇遊びを楽しむ。

・生活発表会後にも劇遊びが楽しめるよう、部屋に劇ごっこコーナーを作る。背景や小道具も置き、小劇場の出来上がった。

・小道具は2セットずつに縮小し、順番に役になって遊べるようにした。

・生活発表会を終え、自信がつき、また緊張が解けた様子でのびのびとアドリブを入れながら楽しんでいる姿や3歳児との関わりに、生活発表会で終わりではなく、その後の活動こそが大切な時間なのだと感じた。



3歳児に自発的に衣装を貸してあげてダンスを教えてあげる子どもたち。

○祇園祭ギャラリーにいこう



夏の親子のつどいで巡行に使い、冬の生活発表会でも使用した鉾を手直ししたりバージョンアップさせ保育所の絵画展や保育フェスタに展示した。自分たちで考え、作り上げた鉾をたくさんの人に見てもらうことができた。このことで子どもたちは自信を持ち、自分たちのイメージが形になることの楽しさをさらに感じられたのではないかと思います。年長児だけの取り組みにせず、手直しは1歳から4歳児クラスの子どもたちにも手伝ってもらい、みんなの作品にすることになった。各クラスに鉾づくりの依頼に行く時もとてもいい表情をしていたのが印象的だった。



2月21日祇園祭山鉾連合会を訪問し会長にお会いし、3月に祇園祭ギャラリーを訪れる計画書のことや、その際少しお話していただくことを理解していただいたかったが、5歳児には難しいとおっしゃった。春からの保育の経過や子どもの様子、祇園祭への関心などを伝える中で、連合会の方々に来ていただけることになり、子どもたちと祇園祭に携われている方との面会が実現することとなった。

祇園祭ギャラリーへ

子どもの姿	環境構成と配慮	教育的働きかけ・関わり方
3月8日 所外保育で祇園祭ギャラリーへ ・祇園祭に携わる方に会えると言うことで数日前から何を聞こうか、と嬉しそうにしていた。当日、京阪祇園四条駅に降りると、「祇園祭で降りたところと一緒や」と目を輝かせ、記念撮影をした場所を見つけては喜び、ギャラリーまでの道中で粽を見つけては喜び、わくわくした表情で速足になっていた。前方に八坂神社が見えると、遠くからだか手を合わせる子どももいた。 - ギャラリーでは、山鉦連合会の方に歴史を話してもらい、本物の鐘を触らせてもらう。重さと音に驚きの表情。聞きたかった質問を自分たちで質問し、連合会の方に答えてもらう。  ・保育所に戻り、給食の後、絵本「祇園祭」を読む。映像で辻回しを見てきたばかりの子どもたち。夏に2回目に読んだときよりも目は真剣。身を乗り出して見る姿があった。絵本で辻回しのページが来ると「見たやつや」「あの木(辻回しの時に鉦の下に敷く青竹)ささって言うんや」と実物を想像しながら絵本を見る子もいた。 ・連合会の方に手紙を書きたいと言う子どもたち。絵をプレゼントしようかと話すと、喜んで描き始める。今までになかった表現として、鉦に乗ったお囃子の人達が、鐘を持っている姿がたくさん描かれていた。 	・事前に子どもたちと鉦のことや祇園祭のことで知りたいことを話し合う。スケッチブックに書き出す。その際、他の子が知っていることは子どもたちの中から答えが出たり、更なる質問がでたりした。 ・観光客もいることを想定し、全員でギャラリーに入ることは控え、半分ずつグループに分かれて鉦見学を行う。 ・連合会の方のお話は全員で動画屏の前で聞く。  	・ギャラリーだけでなく、道中も子どもたちの思いに寄り添い、子どもたちの言葉を拾うようにした。祇園祭シーズンでなくても粽などを発見し、十分に祇園祭を感じられる四条通を歩くことができた。  粽を発見して友だち同士で喜び合う。 「何個見つかるかな？」 祇園祭当日にはゆっくり見られなかった骨組みや、本物の鐘をじっくり観察し、思い思いに友だちとの会話が弾む様子を、保育士は口出ししたりせず、見守るようにした。 ・絵本はストーリーよりも、1つひとつを確認するように子どもの言葉に耳を傾け、場面を止めて進めるようにした。 ・いろいろな場面で自分の好きな鉦の絵を描いてきた子どもたちだったので、鉦の絵には自信があると感じた。 

鐘を持っているお囃子が描かれる。

同じ絵本でも、体験したことや知識によって感じ方が違うことを実感した。

4, 考察

春、保育士が祇園祭について詳しくなかったため、本を読んだり生稚児の舞を見に行ったりと知識を付けることから始まった。知れば知るほど楽しくなってくる祇園祭。保育士もそう感じたが、子どもたちも同じで、「なぜ函谷鉾に鶏が乗っているのか?」「やたがらすってなんだろう?」と調べていくととてもいい表情で答えを見つけてくる子どもたちだった。自分たちが調べたことや実際に見たことをクラスの中で発表したり、作ったりして再現する活動はとても楽しく、保育士もわくわくする日々だった。そして、少しずつ子どもたちが自信をつけていることも感じた。

担任同士で話し合う中で「親子のつどいで祇園祭（お店屋さんごっこ）をしようか」「鉾の巡行もしたいね」とイメージをしていたが、実際は本当に子どもたちの中から「本物の鉾みたいに大きな鉾を巡行させたい」「祇園祭の時みたいにお店屋さんしたらいい」と意見が出て、そのたびに担任同士で子どもたちと思いが同じことに驚き、喜んだ。保育士がわくわくしていると、子どもたちも興味を持ち「次は何が出てくるのだろう」とわくわくした目で保育士を見つめている。そして、保育士発信のことだけではなく、子どもたちからの発信も多くなる。それがわくわくする保育の原点だと感じた。

また、自分のクラスだけで留まるのではなく、他のクラスに発信することで、より活動が広がることも実感した。今後も担任だけでなく、他クラスの職員、所長、副所長、調理師、時には保護者とも相談し、より子どもたちが楽しめる活動となるようにしていきたい。

1年を通して楽しんだ活動は、「祇園祭は夏のもの」という大人の固定概念からは想像できない世界であった。友だちと楽しい経験、満足のいく経験をたくさんしてきた。だからこそ、「祇園祭が好き」「鉾が好き」につながっているのではないかと考える。

平成30年度になり、7月に行われた保育所の夏祭りや宵山で修了児に出会い、嬉しそうに今年の祇園祭のチラシを見せてくれたり、楽しそうに話す姿が見られた。平成29年の祇園祭以降にどんどん詳しくなった祇園祭だからこそ、今年の祇園祭は特別楽しみであったのだろう。平成29年度の1年が終わり、月日が経っても子どもたちの心にはいろいろな形で経験や思い出が残っているのだと実感した。

このように、いろいろな経験をした中で、子どもたちが楽しいと感じ、大人に知識を教えてもらっただけではなく、自分たちの不思議に思うこと、分からないことを調べることが楽しいと感じ、友だちと共にわくわくドキドキを作っていけるような未来につながる土台作りを手伝いたいと思う。